

vol.63 2025 夏号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしづく

その先に、見えるもの

Key Word

- 未来の風景を描く
- 生物多様性の保全・再生
- 「バタコ」が暮らす森
- 森と人をつなぐ経験
- 白屋は思い出の玉手箱
- 生きものと川上の暮らし

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語



森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1
<https://www.genryuu.or.jp>

未来の風景を描く

鳥をモチーフにした作品を多く手がけ、「歩く鳥」から「飛ぶ鳥へ」とやがて「風景の中に鳥が飛翔する姿」を、その後「古都の風景、明日香村の風景をモチーフに」と、歳を経るごとにテーマを発展させ、作品を描くようになった画家、鳥頭尾精（うとおせい）の特別展が、奈良県立万葉文化館で開催されています。

森と水の源流館には、村民や流域の皆様からの様々な想いや情報等が集まっていて「びっくり」と、私が事務局次長としてお世話になった時の「ぼたり」に載せています。いよいよ、3年目となり、「びっくり」ばかりしていただけません。皆様との様々な取り組みで得た価値（思いや情報等）を確認しつつ、「価値を共有」する次のステップにおい、これから川上村が目指す方向と連動し、当財団における事業を次の視点を大切にして推進していきたいと思ひます。

【大切にすること】

- ・ 事業を通じて思いを伝えていく仕組みづくり
- ・ 皆様との活動を環境保全につなげていく“機会・場”づくり
- ・ 「水源地の森」を「自然とのつきあい方の見本」となる森へ

そして、私も身近な視点から俯瞰的な視点へと未来の風景を描けるよう、皆様とともに、素敵な時をすごし、感性を高めていきたいと思ひます。どうぞ、よろしくお願ひします。





奈良県 環境森林部
景観・自然環境課
生物多様性係 係長

やまはら
山原美奈さん

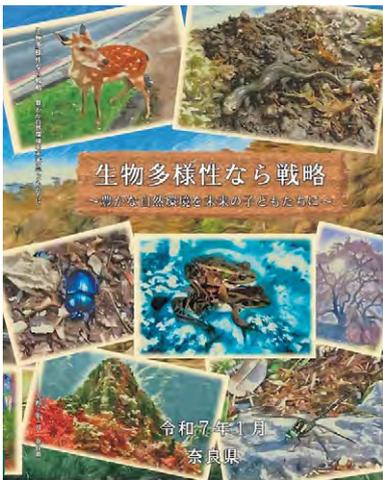


川上村にとって、「水源地」という言葉に

は、吉野川の源に位置する地域であり、長い歴史の中で培われてきた文化や産業をもつ地域として、また、生命を育む源となる地域として、大切に守り伝えていこうという意思が込められています。「水源地」としての責任を果たし、持続可能な「水源地の村づくり」に取り組む川上村は、水源環境を守るとともに、植物や水と人の関わり合いを身近に体験し、学習できる場を創出できるよう、「樹と水と人の共生」をテーマに、企業・団体・大学・個人との協働による村づくりを進めています。

令和7年3月5日付けで、川上村は奈良県と「生物多様性保全・再生の推進に関する連携協定」の締結に至りました。

森と水の源流館では、水源地の村づくりの価値を「生物多様性」の視点から高めていきたいという思いから、「生物多様性な戦略」についてお話をつかがいました。



生物多様性とは

地球上には3,000万種ともいわれる様々な生きものが生息・生育しています。これらの生きものたちはお互いつながり、支え合って生きてきました。もちろん、私たち人間もこのつながりの一部になっています。生物多様性とは、この生きものや生態系の豊かさを表す言葉です。

生物多様性の保全・再生は

人類にとっての安全保障

生物多様性の大切さに気づいてほしい
何気なく吸っている空気。生きるのに不可欠な酸素は植物たちが作ってくれています。植物はたくさん昆虫や鳥、菌類などに支えられて生きています。全ての生き物はどこかでつながっていて、知らない間に支えられています。生き物がどんどん減っていったら、いつか人間も生きられなくなる日が来るかもしれません。生物多様性の保全・再生は、人類にとっての安全保障なのです。

生物多様性なら戦略

奈良県では「生物多様性基本法」に基づき、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する施策を総合的・計画的に推進するための地域戦略として「生物多様性なら戦略」を策定しており、令和7年1月に約10年ぶりの改定を行いました。

今回のなら戦略では、人々の生活や社会経済活動において、生物多様性の保全と持続可能な利用に配慮することが当たり前の社会を目指します。

現状としては、令和4年に実施された県民アンケートの結果「生物多様性」という言葉を聞いたことがある人は、県民の50%を割り込んでおり、詳しく知っていると答えた人はわずか3%でした。

デジタルイベント

「なら生き物いっぱい見つけ隊」

生物多様性の普及啓発というと、自然観察会などが主流ではないでしょうか。ですが現代人は非常に忙しく、特定の日に野外に集まって学ぶのはハードルが高いというのが実情です。そこで今回、いつでもどこでも楽しく生物多様性を学べる仕掛けとして、「市民参加型生き物調査 なら生き物いっぱい見つけ隊」を企画しました。これはスマホで参加するデジタルイベントです。無料の生き物コレクションアプリ「バイオーム」をインストールし、生き物の写真を20種類投稿すれば先着200名様にオリジナルキャンペーンバッグを記念品として差し上げます。家の庭のカタツムリ、花壇にきた蝶、何でも大丈夫です。7月から9月まで3ヶ月間開催しています。詳しくは景観・自然環境課ホームページをご覧ください。無理なく、楽しく生物多様性を感じていただけますと幸いです。



森と水の源流館周辺を散策して生き物を見つけたら、ミッションを達成された方には、特別なプレゼントを進呈！イベントに参加して川上村の生物多様性を是非体感ください！





「バタコ」が暮らす森

―カジカ大卵型の保全に向けた生息環境調査―

川上村とカジカ

皆さんは、「カジカ」という魚をご存じでしょうか？体長15センチほどの淡水魚のことで、川上村にお住まいの方には「バタコ」という名前の方が馴染み深いかもかもしれません。カジカは、河川の中・上流域に生息することが多く、石同士が重なって下に隙間を作る「浮石」を好むとされています。近年、山林の荒廃による沢枯れや、土砂の流入による浮石の消失が日本各地で起こり、カジカはその数を減らしています。



吉野川源流域。大きな軽石はカジカの住処となる

吉野川の源流域では、50年ほど前にカジカの生息調査が行われており、一度の調査で100個体前後が採集できたとあります（水野・御勢、1972）。当時の調査地は「筏場」と呼ばれ、吉野杉を下流へ流す筏をつないでいた場所です。筏が流れるよう、頻繁に底石をかきだして川べりに積んでいたそうで、その隙間にたくさんのカジカが生息していたのではないかとこの話を伺いました。つまり、川上村のカジカたちは、村の産業と生活に密接な関わりを持っていたと言えるでしょう。さらに、紀伊半島は本種の分布南限域であり、その進化や分布の変遷を調べるうえでも重要な地域です。しかし、近年の生息状況はわかっておらず、奈良県のレッドデータブックでは、情報不足種として扱われています（藤田、2017）。そこで、摂南大学では、川上村をフィールドに、生息状況調査を実施しました。

カジカ大卵型とは



①：頭部に明らかなまだら模様がない

②：胸びれの軟条数が12～14本（普通13本）

「カジカ」はかつて1種とされていましたが、現在では3種が含まれると考えられています。吉野川の源流域には、そのうちのカジカ大卵型（以下、カジカ）が生息しています。本種は、比較的大きな卵を産み、純淡水域で一生を送ります。他の種（ウツセミカジカ・中卵型）と外見から区別するのは難しいですが、わかりやすい特徴として、①：頭部や第一背鰭の下に明らかな黒色斑（まだら模様）がない、②：胸鰭の軟条（ヒレを支える筋）が12から14本であるなどが挙げられます。一方、琵琶湖や太平洋沿岸域に生息するウツセミカジカは、比較的小さな卵から孵化した仔魚が一度海へ下り、再び河川へ遡上する生態を持ちます。さらに、日本海側に生息し、両種の中間的な卵サイズをもつものは、中卵型と呼ばれています。これらの間には遺伝的な違いがありますが、未だに分類は混乱しているのが現状です。

カジカの大調査と これまでにわかったこと

調査の目的は、現状として吉野川源流域のどこにどのくらいのカジカが生息しているのか、どのような環境を好んでいるのかを調べることです。そのために、三之公川の合流点から和歌山市民の森にいたる6つの調査地点を設定し、電気ショッカーと呼ばれる専用の漁具を使って魚類を採集しました（写真1）。同時に、流速や水温、浮石の割合などの環境を計測しました。さらに、採集したカジカの体サイズや体重を測定した後に、イラストマーという蛍光色素を皮膚下に注射して放流しました（写真2）。これで個体識別をすることにより、どのくらいの距離を移動しているか、どのくらい成長するかが明らかになると期待されます。



写真1: 調査の様子
(ショッカーで気絶させた魚をすくう)



図1: 分布調査の地点。緑色が発見地点。

まだ調査の途中なので、ここでは詳しく紹介できませんが、複数の再捕獲個体が見られ、三之公川の中ではより上流の地点でカジカが多く生息していること、あまり地間で移動はしてなさそうなことなどがわかってきました。また、広い範囲での生息状況を調べるため、昨年の夏に大滝ダム下流から三之公川にいたる13カ所で魚類採集を行いました。その結果、源流にあたる三之公川、それも合流点より上流でしか生息を確認することができず、現在のカジカの生息地は局所的であることがわかりました（図1）。気になるのは、昔と比べてカジカの生息場所が減っているかどうかです。



写真2: 腎びれの付け根に注射されたイラストマー
(入れ墨のように跡が残る)



写真3: 森と水の源流館調査報告会での成果発表

しかし、それを知る手立てはありません。そんなときに、これまでの研究成果を村民の皆さんに報告する機会をいただきました（写真3）。そして、調査結果の発表が終わった後、村の方とお話しをしている中で、もっと下流でも昔捕まえたことがあるという情報をいただくことができました。今後、こうした住民の方からの情報提供を基に、現在の生息場所との違いを明らかにしていきたいと考えています。また、昨年の分布調査では、かつてカジカがたくさんいたという筏場に入らず、現在との比較ができませんでした。おそらく約50年前の調査当時は河川環境も変わっており、カジカの生息状況がどのように影響を受けているかを調べていく必要があります。そこで今年の調査では、調査地点をさらに増やし、カジカの新たな生息地の発見を目指したいと思います。

保全に向けて

これまでの調査を踏まえて、我々はどういうにカジカを守っていけばいいのでしょうか。まずは、彼らの生息地を増やすことが大切です。特に、彼らの住処となる浮石を増やすことは、効果的な保全策と言えます。また、生息場所が限られている今の状況下では、その生息状況を把握し続けることも重要です。

かつて川上村では、カジカは身近な魚でした。しかし、ダムができ、山林に人の手が入りにくくなり、次第にその姿を見ることができなくなっています。渓流環境を特徴づけるカジカの保全は、川上村の豊かな自然環境を守っていくことにも繋がります。今後も源流域での生息状況調査を継続し、微力ながらカジカの保全活動に尽力したいと考えています。

参考資料

- ・長谷皓介 (2024) 奈良県吉野川源流域におけるカジカ大卵型 (*Cottus pollux*) の分布と生息環境 摂南大学卒業論文 2025
- ・藤田朝彦 (2017) カジカ。奈良県レッドデータブック改訂委員会 (編) pp.197. 大切にしたい奈良県の野生動物植物―奈良県版レッドデータブック2016 改訂版―。奈良県くらし創造部景観・環境局景観・自然環境課、奈良。
- ・後藤晃 (2001) カジカ科。川那部浩哉・水野信彦・細谷和海 (編) p. 654-668. 山溪カラー名鑑日本の淡水魚改訂版。山と溪谷社、東京。
- ・御勢九右衛門 (編著) (2002) 大和吉野川の自然学。トンボ出版、大阪。
- ・水野信彦・御勢九右衛門 (編著) (1972) pp.162-163 河川の生態学。築地書館、東京。

ともしもに
いいき輝く
活動をご紹介します

さて、今回は――

**川上村で森と人をつなぐ経験をえた
安藤 俊朗さんと**

新宮市森林組合で活躍されている安藤俊朗様へインタビューしました。水産業を学んでいたところから、どのようにして林業へとたどり着き、川上村、そして源流人会と深く関わるようになったか興味深いお話を伺うことができました。

海から森へ、自然に導かれた道

もともと水産業に関心を持たれており、漁師との出会いをきっかけに、自然と人をつなぐ第一次産業の役割に改めて興味を抱かれました。しかし、水産業への初期投資の厳しさから、海から森へと目を向けられました。「自然によって人は活かされている」という思いを強く感じていたこともあり、林業の道へ進むことを決意。当時は「緑の雇用」制度もあり、林業に携わる機会に恵まれました。



川上村との出会い、そして辻谷達雄氏との縁

開館20周年の対談（詳細は当館公式YouTubeをご参照ください）でも語られているように、川上村を訪れるきっかけは、知人からの紹介でした。そこで出会ったのが辻谷達雄氏です。辻谷氏から林業の技術やかつての伐採方法、道具の手入れ、そして森や自然に対する考え方を学べたこと、そして源流人会の多岐にわたる活動が、今後へと続いていくこととなりました。

経験から学ぶ技術

印象深い山小屋づくり

林業に従事し始めた20年前は、環境問題も今ほど注目されていませんでした。吉野林業の育林や管理技術も素晴らしいものですが、特に印象に残っているのは、辻谷氏の指導のもと他の会員と協力して山小屋を建てた経験です。「今の建築現場では当たり前に使っている機具や計器を使わずに、よくあんな小屋が建ったと感動しました」と、当時の思い出を語ってくださいました。



源流人会の魅力と未来への期待

また、小中学生を対象とした「もりみずワークショップ」をお手伝いいただきました。子どもたちが自然の中で体験し、学び、成長していく姿は今でも鮮明に覚えていらっしやると思います。源流人会の活動の魅力を「先人から知恵や技術、生きる力を受け継ぐこと」だと語られました。伐採跡の二次林が人々の手によって回復・遷移した事例は、林業の施業としては一般的ではなく、森林の保全としてはあまり前例のない魅力的なケースで、「ぜひこの取り組みを継続してほしい」とお話くださいました。

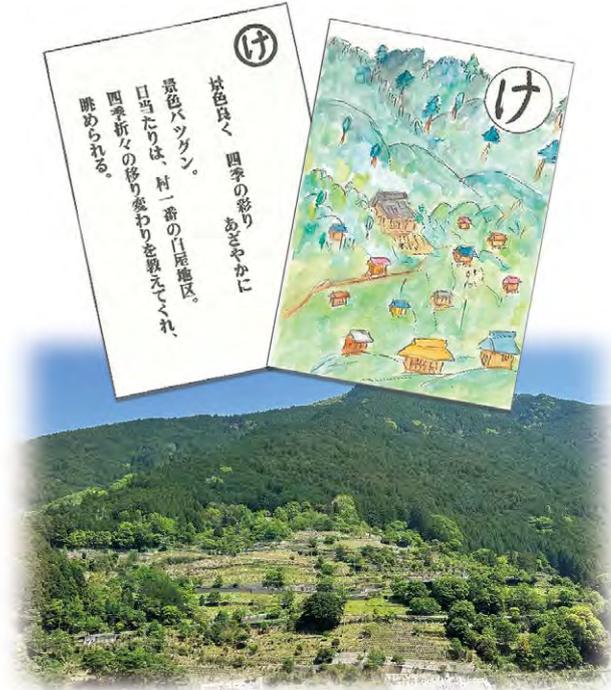
現在、源流学の森へのアクセスは作業道の崩落などにより難しいですが、最後にいただいた「皆さんもぜひ一度、源流学の森へ足を運んでみてください」というメッセージを励みに頑張りたいと思います。



時とつながる

旧白屋地区では、かつてこの地にあった暮らしの風景を、植栽による景観づくりを通して再生する「未来への風景づくりプロジェクト」が行われています。

源流人会で旧白屋出身の岸本直子さんと、横谷好則さんに、「白屋の思い出かるた」と「白屋地区自然文化マップ」作成の想いをお伺いしました。かるたやマップには、白屋区誌には載っていないあの頃の風景が、暮らしの視点から描かれています。当館の事業にも、このような貴重な資料を活かしていきたいと思っています。



かるた作成のきっかけ

森と水の源流館が主催する未来への風景づくり草刈ボランティアで去年50年ぶりに友達に再会した際、ここが集落のメインストリートで、この坂を駆け下りて学校に行つてとか、お寺の前で盆踊りの輪が2重3重に広がってとか、思い出話で盛り上がりました。私たちが暮らしたこの土地は、たくさんの思い出が詰まっています。それは川上村の各集落にも共通することだと思っています。そんな素敵な思い出をみんなに知ってもらい、未来へ伝えていきたいと思い、「白屋の思い出かるた」を作りました。(岸本直子さん)

暮らしの風景

白屋の盆の祀りは迎えから送りまで毎日お墓参りして、精霊棚のお供えしました。とにかく祭りが派手で、タイや果物類などのお供え物をし、仮装行列、千本搦ぎに合わせて響く伊勢音頭、盆踊りに大きな輪ができる秋祭りは一番の楽しみでした。マップには載せていないけれど、夜に懐中電灯片手に石垣の間で鳴いているスズムシを採るのも秋の楽しみでした。今では心の中の宝物となっている記憶を、未来に伝えていきたいと思っています。(横谷好則さん)

想いを媒体にして

お二人のお話は、思い出に浸るのではなく、そこにあった暮らしの風景を伝えていきたいという想いがこめられていました。この想いを聞くだけではなく、当館の活動を通じて、未来への風景づくりに参画頂いているオーナー企業・団体様や、川上村をフィールドに活動いただいている大学など多くの人へとつなげていきたいと思いました。

そこで、お二人に、かるたやマップを手に取り、かつての風景を未来へとつなげていくための提案をいただきました。

白屋は思い出の玉手箱

「思い出話を集めて未来へつなぐ」

かつての住民が定期的に集まり、かるたをしながら思い出話を語り合う機会を作りたいです。思い出一つひとつは私たちににとって宝石のようなもので、未来への風景づくりに協力いただいている企業・団体様にも伝え、活動をとおして一緒に磨き、新たな思い出として積み上げていくことで、素敵な玉手箱が出来上がると思っています。(岸本直子さん)

マップを片手に、玉龍寺や北向き地蔵の跡、公民館にサイレン塔など、名所に看板を立てて、皆さんと一緒に集落散歩ができたと思います。そしてかつての暮らしに興味を持ってくれた方々と一緒に「お月八日」の花竿など、何か共同で準備の段階から関わってもらえるような活動につなげていけたら嬉しく思います。(横谷好則さん)



思い出かるた製作者 源流人会 岸本 直子
自然文化マップ製作者 源流人会 横谷 好則

事業レポート

生きものと川上の暮らし

森と水の源流館では、川上村を含む吉野川紀の川流域の自然や文化について、参加者募集型の調査を実施することをきっかけに、生きものや、暮らしの中で培われてきた文化に関心をもっていただき、さらに、大切にしたいと思つた心を育むため「吉野川紀の川しらべ隊」という取組を行っています。

吉野川紀の川しらべ隊
川上村で生きものをしらべよう

5月17日(土)

川上村でも里山景観が特徴的な東川集落において、生きもの多様な状況を調べるため観察会を行いました。「生物多様性なら戦略連携プログラム」にも位置づけられ、日本野鳥の会奈良支部や奈良昆虫談話会の先生にお越し頂き、参加者は生きものを見つけては質問を繰り返していました。



普段は奈良県北部地域を中心に活動なされている3名の鳥類の先生方は、南部の山間地域での観察は新鮮だとおっしゃっており、川上村の鳥であり、蝶ネクタイがチャームポイントのヤマガラ、ツツドリ、「ポポッ、ポポッ、ポポポ」という鳴き声、耕作地を好むホオジロなどを見つけては、パネルで解説してくださりました。



昆虫の2名の先生方は、得意分野を活かし、雨の止み間をねらって花に集まるハチや、雨のからまない地面につくられたアリジゴク、必死に枝のフリをしているヨモギエダシヤクの幼虫など、樹木や民家周辺でみられる昆虫を中心に、見つけるコツや特徴などを解説してくださりました。



雨が降ったり止んだりする中での観察会になりましたが、鳥類15種、昆虫39種、その他の生きもの11種を見つけることができ、里山らしい生きものを観察することができました。30名の参加者は、65種類もの生きものが見たことにびっくりしていました。

このように活動を通じて生きものに関心を持って頂き、私たちの暮らしは生きものにより支えられていることを今後も伝えていきたいと思えます。

おおたき龍神湖 お散歩観察会
4月6日(日)・12日(土)

水辺には地域の自然や歴史、暮らしで育まれた文化など地域特有の資源がみられます。そこで、森と水の源流館では、水辺の遊歩道を活かして観察会を行いました。



おおたき龍神湖を一望できる「宮の平遊歩道」では、わずか1000歩程度の道に、これまでの調査で250種以上の生き物を記録しています。身近にこれだけ見られるのは川上村ならではの。湖面へ開けた眺望や「豊かな海づくり大会」でご臨席された当時の天皇陛下が詠まれた御製の碑、かつての林業の材木運搬の道具「修羅」を模した放流台のレプリカもあります。これだけの資源を活用しないのは、とてももったいないことです。昨年度、

一緒に楽しいマップを
つくりましょう!



秋の試作版
春・夏・秋・冬版へ

源流人会の皆さんにお送りした「観察マップ」も資源活用の一歩。今回の観察会ではマップを手にも、遊歩道の価値を共有するねらいもありました。両日で、7名の方に参加いただき、いく種類もある満開の桜や春の花々を楽しみました。村民の方、村出身の方もいらつしやう「大滝ダムに沈む前にはあそこにあれがあつて」と昔の景色と重ね合わせて歩かれていたのが印象的でした。

森と水の源流館では、自然や民俗調査結果を活かして「観察マップ」の春夏秋冬版を作成していきたいと思っています。

みなさんに遊歩道を歩いていただき、興味を持ったもの、感動したもの、伝えていきたいものなどの情報を是非お寄せいただければと思います。一緒に作ったマップが、当館来館者をはじめホテル杉の湯にお泊りいただいた方など来村者の新たな楽しみになることを期待しています。

源流人募集



年会費

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

郵便振替
00940-1-331163

夏休みワークショップ
や水源地の森ツアーなど
様々な企画を用意してお
りますので、「源流人会
への新規入会・更新を心
よりお待ちしております。